

夏目漱石著「吾輩は猫である」新潮文庫、新潮社 1961 年 9 月 5 日刊を読む

吾輩は猫である

1. 吾輩^{わがはい}は猫である。名前はまだ無い。
2. どこで生まれたか^{とん}頓と見当がつかぬ。
3. 何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。
4. 吾輩はここで始めて人間というものを見た。
5. 然^{しか}もあとで聞くとそれは書生という人間中で一番^{どうあく}獰悪な種族であったそうだ。
6. この書生というのは時々我々を捕^{つかま}えて煮て食うという話である。然しその当時は何という^{かんがえ}考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。
7. 但^{ただ}彼の^{てのひら}掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じが有ったばかりである。
8. 掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが所謂^{いわゆる}人間というものの見始^{みはじめ}であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。
9. 第一毛^{もっ}を以て装飾されべき筈^{はず}の顔がつるつるしてまるで薬罐^{やかん}だ。その後猫にも大分^あ逢ったがこんな片輪には一度も出会わした事がない。
10. 加之^{のみならず}顔の真中が余りに突起している。
11. そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと^{けむり}烟を吹く。どうも^む烟せばくて実に弱った。
12. これが人間の飲む^{たばこ}烟草というものである事は漸く^{ようや}この頃知った。

P5

<コメント>

中学生の時に数ページ読んだが、よくよからない内容なのでそのままにしておいた。気を取り直して、高校3年生の夏休みにやっとの思いで読み終えたのが、この夏目漱石の「吾輩は猫である」だ。正岡子規と高等学校の同級生であることを知って子規と漱石の作品を同時併行して読むようになってから、2人の作品に親しみがわいてきた。近頃では漱石も子規もスラスラと読めるようになり助かる。